

〈劣等人種〉間における動的な力関係

—寒川光太郎『^{マタ・イタム}黒い瞳』における「ボルネオ表象」—

デウィ アングラエニ

一 はじめに

インドネシアに派遣された南方徴用作家には、陸軍（ジャワ方面）と海軍（ボルネオ・セレベス方面）という、二つの従軍先があった。徴用作家たちは大東亜共栄圏のスローガンの下、宣伝班として従軍記、あるいは小説を通じて現地を報告する任務を遂行した。しかし、派遣された各島の事情により、現地の描写のパターンはそれぞれ異なるものとなっている。その原因について、神谷忠孝氏は「陸軍の報道班員の多くは占領が終了したあとに現地入りしているが海軍の場合は前線に赴く船に同乗しており臨場感がある反面、戦争に巻き込まれることが多い¹」と指摘している。

ただ、陸軍と海軍のどちらの場に身を置くにしても、長年ヨーロッパに植民地化されてきたインドネシアの実情を日本人作家たちが十全に描けているわけではない。注目すべき点は、徴用作家たちが目にしたインドネシアが、蘭領東印度政府によって形成された、支配と従属という、非対称的な関係の下で多数の人種・異種文化が共存する社会的空間、いわゆる「接触領域」(Mary Louise Pratt)²であったということである。インドネシアが「接触領域」であることは、蘭領東印度政府が形成した、人種に基づく「社会階層」³による対立から確認できる。このような社会階層の位置づけにおいて、オランダ人、他のヨーロッパ人、日本人⁴と欧亜混血⁵は第一位、外来東洋人（華僑、インド人、アラビア人と他の中東人）とアジア混血は第二位、先住民（民族を問わず）は第三位である。⁶この厳格な階級社会の中で人種間の対立が起こることは珍しいものではない。⁷こうした状況は、徴用作家たちが目撃した植民地の現実であるものの、宣伝任務としての役割を求められた報告文や小説などにおいて、その現実を十分に描くには限界があろう。

徴用作家たちによって書かれた作品はどのように評価しうるのか。本稿が論じるのは、寒川光太郎（1908-1977）⁸の作品である。徴用前、寒川は樺太・北海道の荒寥たる山野や北洋を舞台に、自然と人間との対決をテーマとする作品で知られた。太平洋戦争中に、海軍報道班員としてインドネシアとフィリピンに従軍した経験を持つが、戦後は文壇から忘れ去られた。海軍報道班員の作品には、「現地の風習より、前線の様子を伝える記録のほうが多い」⁹という傾向がみられたが、寒川光太郎の作品は必ずしもそうではない¹⁰。

本稿で扱う、短編小説「黒い瞳」(『現代』、1943年8月)¹¹は、戦争の描写もなく、中心となる登場人物も一般人である。無論、宣伝任務としての役割を求められた本作品には、大東亜共栄圏の思想が反映されている。それは、同種同族の概念下にある日本人とインドネシア人において相互に交わされる好意的なまなざしや、悪人として描かれる欧州人像などである。¹²だが、混血ではない、純粋な白人の主要人物は登場しない。その代わり、長年に渡るオランダの支配から、日本の占領下へと変化する時期にあったボルネオ島で、「混血児」「先住民」「在留日本人」といった植民地に存在する〈劣等人種〉が互いに序列を付け合うという、もっと複雑な主題が描かれている。この主題を通して、「黒い瞳」はボルネオを多人種間の動的な力関係を意識させる場、いわゆる「接触領域」として表象するものだと言えるだろう。

本稿は、こうした「ボルネオ表象」を提示する、「黒い瞳」で用いた寒川の手法を明らかにすることを目的としたものである。あわせて、宣伝任務としての役割を担わされた微用作家の作品の評価の可能性を探りたい。

二 日本人収容所の機能—〈矛盾〉する人種差別—

「黒い瞳」が語るのは、日本の宣戦布告後から日本占領下へと移行する転換期のボルネオにおいて、在留日本人の収容所を舞台に相互に作用し合う、種族的出身及び所属階級が異なる四人の姿である。作品の各主要人物の名前、身分、出自、関係性を以下の表に示す。

表 小説「黒い瞳」の人物設定

身 分		種族的出身	所属階級
オランダ監視兵	収容者		
モンテロ大尉 (男性)	ユーピー (女性)	欧亜混血	ヨーロッパ人 (第一位)
	佐竹技師 (男性)	日本人	ヨーロッパ人 (第一位)
アマス伍長 (男性)		インドネシア人	先住民 (第三位)

作品の梗概を述べる。ある日、在留日本人の収容所に欧亜混血のユーピーという女性が連れて来られた。インドネシアのミナハサ族の血を引いているが、「元来ミナハサ人は甚だよく日本人と似通ふてゐる」という理由で、ユーピーは日本人の収容所に投げ込まれてしまう。オランダ雇兵隊長であるモンテロ大尉は、収容者らの抗議を受け、部下の中から日本人と関わりのある者を収容することで、抗議を治めようとする。モンテロ大尉は部下を集めると、真意を隠して日本人に好意的な者を募り、「オランダ政府はその者に報酬と

階級を興へ、収容所の監視長に任命する」ことを呼びかけた。部下の一人であるアマス伍長は、地位の向上を望んで名乗りを上げたが、その期待は裏切られ、虐待を受けた上、収容所に投げ込まれてしまう。後に日本帝国海軍が上陸し、ボルネオで統治を開始した際、日本人収容者の一人であった佐竹技師は「豪州から交換船で歸還」し、「立ち上がる民族への指導に従事」するためにボルネオへ戻った。そこで、日本人軍部の運転手になったアマスと再会する。アマスに誘われて劇場へ行くと、バイオリンを弾くユーピーがいた。

本稿は、「黒い瞳」におけるボルネオが、多人種間の動的な力関係を意識させる場として表象されているという、「ボルネオ表象」の読まれ方を提供するものである。こういった「ボルネオ表象」を提示するために、なぜ日本人の収容所を舞台の中心として設定する必要があったのか。

1941年の日本の宣戦布告により、連合国及び連合国の植民地に住む日本人は、敵国人として扱われるようになった。蘭領東印度の場合、在留日本人は収容所に収容されており、同年12月末頃、汽船でオーストラリアに移送され始める。¹³ こうした時代背景を踏まえてみると、「ヨーロッパ人は悪人、アジア人は犠牲者」といった、典型的な大東亜共栄圏の思想を描写するために、日本人の収容所は相応しい場であることが、理由として考えられるだろう。ただし、本作品における日本人の収容所は、人種差別の実践の中で矛盾が起こった場所として描き出されている。

東南アジア学を専門とするオーストラリア人学者である Adrian Vickers 氏は、人種に基づく階級社会の中では「人種的意識は植民地社会の原動力」(*Racial consciousness is the life blood of colonial society*) であるため、いうまでもなく「色白の人」が一番上の階級に置かれていたが、「蘭領東印度では、「色白」とはどの程度の色なのかははっきり定義されてはいなかった。結局、植民地政府は区別をつけようとしたとき、矛盾が起こった」と指摘している。¹⁴ つまり、表面的に「白人／ヨーロッパ人は強者、〈有色人〉／非ヨーロッパ人は弱者」といった意識に基づいて人種差別が行われていたが、実際にはそうでない場合もあった。なお、Vickers 氏が指摘した「矛盾」は、第一階級に所属する欧亜混血の間に起こるものを指しているが¹⁵、本作品では、下級の者が自身より高い階級の者を見下ろすこと、上級の者が特別な扱いを失うことへと展開していると考えられる。

「黒い瞳」において日本人の収容所は「この町端れ、なだらかな川岸の陰に集散物資の小さな倉庫がある。その地下室が假収容所にあてられた」(169頁)と描写される。Vickers 氏が指摘した、表面的には見えない差別実践の矛盾が、まさにこの人目につかない隠された空間内で起こるのである。こうした矛盾は、日本人収容者の佐竹、オランダ雇兵のアマス、と欧亜混血のユーピーの存在を通して描かれる。蘭領東印度政府によって形成された厳格な階級社会の中で、欧亜混血であるユーピーと佐竹は第一位に、先住民であるアマスは第三位階級に置かれていた。だが、日本の宣戦布告によって、日本人は敵国人として扱われるようになり、蘭領東印度の認めた人種からは外れた存在となる。言うまで

もなく、収容者とされることによって、佐竹は上級の者としての扱いを失う。さらに、本来ならばヨーロッパ人として扱われる立場にあるユーピーまでもが、「よく日本人と似通ふてゐる」ために、日本人の収容所に投げ込まれてしまう。植民地政府に守られるはずであったユーピーは「敵国人」として扱われ、「高貴な階級から自分の位置へと突き落とされた」存在となる。¹⁶

一方、先住民であるアマスは一番下の階級に置かれていたが、オランダ雇兵となることで、強者の側に位置付けられるようになる。¹⁷ アマスは強者の立場を得たことで収容所の監視兵を務め、「おい、混血娘！」などと、自身より高い階級に属するユーピーに敬称を付けずに呼び、彼女と佐竹を「一層侮辱の色を深める表情」で見下ろすことが可能となる。

注目すべきは、本作品で語られる日本人の収容所が、支配階級が移り変わる転換期中で造られたという点である。この時期でなければ、「白人／ヨーロッパ人は強者、〈有色人〉／非ヨーロッパ人は弱者」といった、人種意識に従わない差別行為は可能ではなかった。¹⁸ 小説「黒い瞳」は、このような舞台設定によって、植民地に存在する多人種間の力関係は不変のものではないことを提示しているのである。

三 〈劣等人種〉に託された役割

ここまで見て来たように、「黒い瞳」における人種間の力関係は、「社会階層」によってのみ規定される単純なものではなく、時代の変化に連なるものである。では、人種間の動的な力関係を提示する者として、なぜ純粋な白人が登場しておらず、〈劣等人種〉でなければならなかったのか。本作品は、ヨーロッパの植民地主義が築いた人種に基づく階級社会の仕組みにおいて、被支配者の間での共感性が形成され難いといった、植民地の現実を提示するために、〈劣等人種〉のみに目を向けて描いたと考えられる。

以上に述べたように、厳格な階級社会の中にあっても、「白人／ヨーロッパ人は強者、〈有色人〉／非ヨーロッパ人は弱者」という人種意識に従わないという、差別実践の矛盾は起り得る。こうした状況下において、強者に支配された者は自らを〈優越種〉の特質に結びつけながら、互いに序列を付け合い、強者に対して取り入るような態度を見せる。ヨーロッパ植民地時代における「優越感」は白人だけが持ち得るものではなく、「白い肌」、「欧州の言語力」、「クリスチャン」といった白人の特質もまた、支配的な地位を象徴するものとして意味をもつ。¹⁹ 白人以外の人種の間にも、自身を〈優越種〉の特質に結びつけることによって、他者より「優越」するという考え方が現れるのは当然のことである。この考え方は、アマス、モンテロ、ユーピーの性格に反映されている。

まず、アマスの性格を見てみよう。階級社会に強く捉われていたアマスの性格は、以下のように描写されている。

以前は遠くバリト上流のゴム園で働いてみたことがある。(中略) その後募兵に應じ

たのだが、ウヘルヘルミナの肖像の前で忠誠を誓つて以来、回教潔く捨て、しまつたのである。(中略)他のインドネシア達とは變りなかつたが、一方後悔めいた感情に驅られながらも、一と際秀れた高い位置に自分はあるのだといふ幼稚な誇りのために、それを何等かの方法で示さねばならぬと常々考へ行動するやうになつてゐた。(180頁、傍線は引用者、以下同様)

以上の引用文が示すように、アマスは階級の上昇のために、優越種の特質に自身を関連付けようとする。かつてアマスは、日本人のゴム園で働いたことがあった。²⁰ オランダ王立東印度軍の志願兵に応募して、キリスト教へ改宗した。アマスの民族は不明であるが、オランダ雇兵に応募した後、イスラム教を捨ててキリスト教へ改宗したため、おそらくジャワ族出身と推測される。アメリカ人歴史学者である George McTurnan Kahin は、オランダ王立東印度軍の大多数が先住民兵であったこと、特にキリスト教領の東部インドネシアから来たアンボン人、ミナハサ人、チモール人は多く採用されており、イスラム教領の西部インドネシアから来たジャワ人・スンダ人と比較して、高い賃金で雇われていたことを指摘している²¹。キリスト教は白人の特質であるため、白人でなくてもクリスチャンであれば、特権的な扱いを受けた。

オランダ雇兵になったアマスは、「胸を張つて、ピシン！と指を鳴らし、さて聞きかじりのオランダ語を自分の會語に」挟むというオランダ正規士官の身振りを真似るようになる。また収容所では、自身より高い階級に属するユーピーと佐竹が、「地下に呻吟してゐる現実に、何となく心愉し」さを感じる。「出来るだけ仲間であるインドネシアと反對の立場をとり、とる事によつていつも自分が勝つといふ絶対性を、彼はこよなく愛してゐた」(181頁)といった言葉に表されるように、自身が優位に立とうとする態度を、他人種だけでなく、同じインドネシア人に対しても示している。

アマスは地位の向上を望んでいたことから、モンテロの「誰かこの中で比較的日本人に好意を持つてゐる者は居ないか。さすればオランダ政府は報酬と階級を興へ、収容所の監視長に任命する」(191頁)という呼びかけに応じ、「以前日本人のゴム園で働いたことがあります。忠實に勤めました！永い間！」(192頁)と自身の日本人との関わりを主張する。モンテロに「日本語は喋られるかね」と聞かれると、アマスは「その日本人はあまり直接話した事がない」(193頁)と答えるなど、日本語が話せないながら、名乗り上げた。しかし、モンテロの真意は、部下の中から日本人と関わりのある者を収容し、抗議を治めることであるため、地位の向上という期待は裏切られ、アマスは虐待を受けた上、収容所に投げ込まれる。

作品の結末部分で、アマスは日本軍の運転手となって佐竹と再会するが、「あつ、トワンだ、トワンだ」(旦那様)と敬称を付けて佐竹を呼び、「感激のあまり取纏つて」(202頁)泣いた。実際には、日本が上陸すると、ヨーロッパ人、欧亜混血、オランダ雇兵を務めたインドネシア人は日本軍の捕虜とされたが²²、なぜアマスが生き残って日本軍の運転手と

なったのかは、説明されていない。注目すべきは、かつては日本に対する親近感を持っていなかったにも関わらず、佐竹への尊敬を示すという、アマスの態度の変化である。これは、オランダが降伏してポルネオが日本の支配下に置かれ、日本人が新しい「優越種」となったためであり、強者に対しておもねるような態度として解釈できる。こういった態度について、作品は「一例外なく、インドネシア達の心中には、三百年來の壓政が種々な形と變つて鬱積してある事に、アマスは氣附かなかつたのだ」(181頁)と説明している。

次に、モンテロの性格を見てみよう。欧亜混血であるモンテロは、以下のように描かれる。

このモンテロ隊長は、そのがつしりした偉容に拘らず、全體から女のやうな柔軟さを人に感じさせるのは、疑ひもなくその白皙から來てゐる。彼は、この地方にある正規の士官學校を出てゐたが、少しはアラブの血が混じつてゐるといはれてゐた。人種的純血など、云ふものは少しも望まれぬ土地であつたので、彼とて純粹のバタビ族の出（オランダ人）でなくとも一寸も奇妙なことではなかつたが、標悍なアラビア血が少しは流れてゐる故か、白皙のその一皮剥いた底の方には、妙などす黒さが沈んでゐるやうにも思はれた (182頁)。

モンテロは欧亜混血であるため、一位階級の「ヨーロッパ人」に位置付けられる。さらに、「白皙」の肌を持っており、外見的にも純粋なヨーロッパ人に近い特徴を持つ。しかし、本作品においてモンテロの「白皙」の肌はすぐれたものとしては描かれない。モンテロの「白皙」の肌は「全體から女のやうな柔軟さを人に感じさせる」と述べられるなど、軍人としては不適合な女性性を付与するものとして、負のイメージをもって捉えられるのである。本作品は三人称視点で語られてはいるものの、その視点は中立的でなく、白人至上主義とは異なる価値観を提示するものといえる。

この作品は外見的に純粋な「白人」のように見えるモンテロを「混血児」として設定することにより、同じ上級に属する「ヨーロッパ人」の間にも、他者より自身が優位に立つとするとといった、差別実践が起こることを提示していると考えられる。

蘭領東印度に存在する「ヨーロッパ人」には、「純血」(*pures*)と「滞在者」(*stayers*)の二種類があり、オランダから来た白人と蘭領東印度に生まれた白人あるいは欧亜混血に分類される。²³「自分の本國を知らなかつた」モンテロは、おそらく蘭領東印度で生まれた、「滞在者」の欧亜混血と推測される。モンテロは「この地方にある正規の士官學校を出てゐた」ものの、「はるぐ赴任して來る本國人達には決して負けては居なかつた」(183頁)と描かれる、優秀な混血の士官といえる。しかし、「負けては居なかつた」といった言葉に表されるように、欧亜混血が白人より劣っているという考え方が文意には反映されていると言えよう。

オランダの支配当初は、上級の官職は白人のみ雇われていた。しかし、白人の不足を補うため、19世紀後半から欧亜混血が多く雇用されるようになったという。²⁴特に、警察や軍隊として雇われた欧亜混血の場合、純粋なヨーロッパ人と先住民の対立関係に置かれて

いた、「盾となる存在」(buffer group)となる。²⁵モンテロが「本國人達には決して負けては居なかつた」理由とは、「長年住み育つた土地の事情に詳しく、住民達の何處を壓へればいゝかといふ一種の^マカン所」(183頁)という、植民地に生まれた欧亜混血ゆへのメリットにあることが本作品の中では明かされている。

欧亜混血は、ヨーロッパ人として合法的に認められながら、社会的に純粋な白人と同様に扱われてはいなかった。絶対の強者である白人を優越することは不可能であるため、自身が「優越種」に属することを主張するために、自身より低い階級の者、或いは「有色人」に近い特徴を持つ同じ欧亜混血を見下ろすようになる。モンテロがユーピーを尋問する場面では、二人が互いに、自身こそが〈優越種〉に属することを主張し合う様子が描かれている。ユーピーは「私は英國人ですツ、あゝ敵と間違へられるなんて」(186頁)と、自身が「ヨーロッパ人」に所属することを主張する。しかし、モンテロはユーピーの主張を取り合わず、その欧州性を否定しており、「その黒い^マ瞳だ！そんな黒さを持つてゐるのは日本人しか居ないのだ。鋭い、獣の眼！まるで占師のやうな嫌な瞳、悪魔の眼だツ！」(186頁)と、その東洋性を指摘する。

またモンテロは、日本人を「黄色い豚」「足の短い豚」(187頁)と民族差別的な言葉を用いて辱める。こうしたモンテロの侮辱に対して、日本人収容者の佐竹は、「オランダ側のこの待遇は、邦人に對する憎惡の念からばかりでは決してない、いやそれよりもつと酷い觀念から出發してゐたのだ。——「犬と支那人入るべからず」この支那の傍らに小さな日本といふ國がある、それが彼等の持つ一般的な常識なのだ。」(174頁)と考える。しかし、モンテロの侮辱は、単に中国人・日本人などの黄色人種が白色人種より劣っているといった、蔑視観からのみ生じたものではない。それは、19世紀からヨーロッパ・北アメリカで現れた黄禍論にもとづく、東アジア人に対する恐怖に由来するものといえよう。黄禍論とは、中国人や日本人が白色人種に与える脅威を論じたものである。中国人労働者との競争、日露戦争での日本の勝利によって、白色人種は「彼等の古い頂上で自ら檻を作ってしまった」(174頁)と感じ、黄色人種に支配されることを恐れるようになる。²⁶しかし、「ヨーロッパ人」の扱いを受けてはいるものの、純粋な白色人種ではないモンテロがユーピーの東洋性や日本人を侮辱するのは、滑稽な構図である。

最後に、ユーピーの性格をみてみよう。ユーピーは、以下の通り描かれている。

佐竹には、永いこの地方での経験で、その女が可成り複雑な混血種だといふ事が一目で判つた。元來ミナハサ人は甚だよく日本人と似通ふてゐる、従つてその女も日本人と見紛ふばかりの容貌で、それだけでも佐竹には理屈なしの親しみを覺させたのであつたが、ミナハサの女でない證據には、それが特徴の黒ずんだ厚い唇はなく、はつきりと見ひらいた瞳にだけ東洋の感じは認められた。(中略)疑ひもなくインドネシアの血は混じつてゐる。だがそれよりもつと確實なことは、歐洲人の血も混じつてゐるといふことだ、と佐竹は、この時南方に彷徨ふ混血児の希望のない宿命を想ふのであつたが、深

い訝りは他の者と同様であつたから、再三先刻の問ひを繰り返してみた（170頁）。

ユーピーは、日本人に似た容姿を持ち、日本人収容者の佐竹に「理窟なしの親しみを覚えさせた」。だがユーピーは、当然のことながら日本人ではなく、ヨーロッパ人、インドネシア人の特徴とも異なる容姿を持っており、「インドネシアの中には小麦色や銅色の肌も珍しくはない、又ミナハサ人のやうに淺黒いのもある。が、その女の黒さはどれにも當てはまらないやうであつた」（176頁）、「全體が、歐州人でもない熱帯人でもない、飽くまでも独特な種類の雰囲気を醸し出してゐるのであつた」（184頁）と描かれる、どの人種にも属さない存在といえる。

ユーピーは東洋の血を引いていても、「オランダ人の性質を見せつける」など、自身の欧州性を自慢している。佐竹に「何をして此處へはふり込まれたのかね」と聞かれると、ユーピーは「冷えぐとした」「親しみのあるものではなかつた」（170頁）と形容される視線と、「人種的なあの嫌な感情さえ含まれてゐる」（171頁）態度をもって、「私はユーピー」とのみ答える。日本人に対して親近感を持つことはなく、自身を支配種であるヨーロッパ人の側に位置づけている。ユーピーにとって、日本人に似ているという理由から在留日本人の収容所に投げ込まれたことは、まさに屈辱であつた。それは、「航海の途中で憎い日本人共が戦争を始めたといふのを知りました。極道！鬼！猛獸！噫隊長、何故私をそんな奴等の檻へ投げ込むのですか」（184頁）、「敵！敵と一緒にゐるなんて、侮辱です」（185頁）といった言葉にも強く表されている。

だが、こうしたユーピーの欧州性に対する誇りは絶対のものではなく、時代の変化と共に失われてしまう。それは、本作品の結末部分で暗示される。

小さな演奏所で、一応に正面を凝視めたまゝ弾いてゐる女の横顔を見た時思はず「アツ！」と軽い叫びを立てずに居られなかつた。端正な美しい顔は、正しくユーピーに相違ないのだ。そして驚くべき事に、あの時のヴァイオリンから、シーンと鎮つた場内へ流れ出してゐる曲こそ、優しい日本の「荒城の月」であつたのである（202頁）。

以上の場面から確認できるように、日本統治下となつたインドネシアで、かつて「ヨーロッパ人」に属していたユーピーは生き残る。実際には、日本の占領が始まると共に、インドネシアにおける社会階級も大きく変化した。新たな支配階級となつた日本人は第一位、インドネシア人及び外来東洋人は第二位、ヨーロッパ人は第三位であつた。ヨーロッパ人の多くは殺されたり、強制収容所に投獄されたりした。欧亜混血の場合、欧州の血を否定しなければ、純粋なヨーロッパ人と同じく、強制収容所で悲劇的な運命を迎えたのである。これについて、インドネシア出身のオランダ人学者である Justus M. van der Kroef 氏は「欧亜混血の大部分は、インドネシア人としての身分を認めており、インドネシアの祖先を持つという証拠を提供する」²⁷ ことを指摘している。英国人であることを自慢していたユーピーもまた、日本統治下に生き残るために、インドネシアの祖先を持つ事実を頼り、その証拠を日本占領政府に提供したことが推測される。日本に対する親近感を持たなかつた

ユーピーが、後に劇場で日本の歌を演奏するという態度の変化は、アマスと同じく、時代と共に移り変わる支配階級に従い、さらにそこに連なろうとする行為として見なされる。

小説「黒い瞳」は、絶対の強者であった白人を登場させないことで、被支配者としての〈劣等人種〉が互いに親しみを持つことなく、時代の強者に自身を結び付けて〈劣等人種〉間での優越感を得ようとする、植民地で起こっていた、多人種間の動的な力関係を明確にした作品と考えられる。

四 おわりに

「黒い瞳」は、異人種の主要人物が互いに序列を付け合う様子を描いているものの、その結末は「重苦しい雨期、これが過ぎたらバリト河の脈々とした流れの傍で、又あの「ソロの流れ！」を聞くことが出来るであろう、彼等の唄聲がどんなに生々としてゐる事か、と佐竹は思った」(203頁)という中途半端な印象を与えるものである。なぜ、オランダ雇兵であったアマスと「ヨーロッパ人」という位置づけにあったはずのユーピーが、日本の統治下に生き残ったのか。本作品を読みすすめてきた者が当然抱くであろう、その疑問については、全く説明されていない。残念なことに、これまでに草稿は発見されていないため、本作品が検閲を受けたか否かについては確認できない²⁸。ただ、宣伝任務の役割を持つ徴用作家の作品は、日本人と南方民族の共存共栄の理想を掲げなければならないため、このような物語の帰結は、当時の徴用作家に書き得る限界であったといえよう。

しかし「黒い瞳」は、「日本の統治下で南方は平和な場所」と説く陸軍報道班員による作品、あるいは「南方は戦場」といった海軍報道班員による作品の傾向とは異なる。具体的な戦争描写はなく、絶対の強者である白人も登場させていない。本作品は、オランダ植民地から日本占領下へと移行する転換期において、移り変わる支配階級に従おうとする〈劣等人種〉の目まぐるしい態度の変化を描くのであり、ボルネオを多人種間の動的な力関係を意識させる場として表象するものである。また、本作品は宣伝小説に位置付けられるものであるにもかかわらず、「接触領域」としてのボルネオで起こった、ヨーロッパの植民地主義が築いた人種に基づく階級社会による対立という、植民地の現実を物語るものである。

Mary Louise Pratt 氏が定義した「接触領域」の概念においては、支配と従属の関係の下で、異種文化が相互に衝突したり、絡み合ったりするという状況は、脱植民地化と共になくなったというわけではなく、その余波(“aftermaths”)が存在するとされている。本作品では描かれていないが、小説のテーマとしての人種間の対立は、まさに日本の統治時代、日本の降伏後、そして現在もなお起こっている問題であろう。²⁹すなわち、「黒い瞳」はオランダ植民地政府から日本海軍へと支配階級が移り変わるインドネシアの転換期を舞台としつつ、今日的な問題を提示しているとも言え、このことこそが、論者が多くの徴用作家たちの作品群の中から「黒い瞳」をとりあげ、本作品を評価する所以である。

注

- 本文引用は、短編集『敵』（金星堂、1944年2月）に収録した「^{マタ・イタム}黒い瞳」に拠るものである。
- 1 神谷忠孝「海軍報道班員―寒川光太郎を軸に―」（『留萌文学』2001年8月、154頁）。なお、なぜ多くの海軍報道班員が戦争に巻き込まれたのかについては、最も激しい戦いがボルネオ島、東部インドネシアのセレベス島、アンボン島とチモール島で行われたことが理由として挙げられる。（Jean Gelman Taylor, *Indonesia: Peoples and Histories*, Yale University Press, 2003, pp. 310）。
 - 2 「接触領域」（*contact zone*）とは、スペイン・ポルトガル文学の学者である Mary Louise Pratt が提示した用語であり、「植民地主義と奴隷制、或いは今でも存在しているその余波のような、支配と従属という、しばしば非常に非対称的な関係の下で、異種文化が出会い、相互に衝突したり、絡み合ったりする社会的空間を指す」と定義される（Mary Louise Pratt, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge, 1992 (Second edition, 2008), pp. 7）。
 - 3 19世紀半ば、蘭領東印度政府によって、キリスト教と非キリスト教という宗教に基づいて形成されたが、後に人種に基づくものへと展開していった（Paul W. van der Veur, “The Eurasians of Indonesia: Castaways of Colonialism”, *Pacific Affairs*, Vol. 27, No. 2, June 1954, pp. 124）。
 - 4 日蘭通商航海条約（1896年）により、海外の在留日本人はヨーロッパ人と同等の権利を持つようになった（C. Fasseur, “Cornerstone and Stumbling Block: Racial Classification and the Late Colonial State in Indonesia”, *The Late Colonial State in Indonesia: Political and Economic Foundations of the Netherlands Indies 1880-1942* (Robert Cribb, ed.), KITLV Press, 1994, pp. 37）。
 - 5 欧亜混血は、一般的に、ヨーロッパ人男性とインドネシアの先住民女性の法律婚或いは内縁関係から生まれた人々を指す。植民地ではヨーロッパ人女性の人数不足のため、植民地運、栽培者、官僚などの中で、内縁関係の実践は広がった。この関係から生まれた欧亜混血は、ヨーロッパ人として合法的に認められた（Justus, M. Van Der Kroef, “The Indonesian Eurasian and His Culture”, *Phylon (1940-1956) Vol. 16. No. 4, 4th Qtr 1955*, pp. 452）。
 - 6 Justus M. van der Kroef, “The Changing Class Structure of Indonesia” (*American Sociological Review*, Vol. 21, No. 2, April 1956, pp. 139）。
 - 7 例を挙げれば、純粹のヨーロッパ人より、欧亜混血は警察、公務員、軍隊などとして多く雇われた（W. F. Wertheim, “The Indo-European Problem in Indonesia” (*Pacific Affairs* Vol. 20, No. 3, Sept 1947, pp. 294）。しかし、純粹のヨーロッパ人ほど賃金は高くなかった（Adrian Vickers, *A History of Modern Indonesia*, Cambridge University Press,

2005, pp. 27)。また、オランダ王立東印度軍となった先住民の中で、キリスト教領の東部インドネシア人は、オランダ王立東印度軍に多く採用されており、イスラム教領の西部インドネシア人と比較して、高い賃金で雇われた (George McTurnan Kahin, *Nationalism and Revolution in Indonesia*, Cornell University Press, 1952 (Paperbacks Edition, 1970), pp. 453)。

- 8 寒川光太郎は、日本の〈外地〉の滞在経験を持つ作家の一人である。北海道で生まれ、8歳で樺太大泊に移住した。樺太と満州で新聞記者として勤めた経験もある。1939年7月、同人誌『創作』創刊号に発表した『密猟者』で、翌年に第10回芥川龍之介賞を受賞しており、後に菊池寛の推薦で南支に短期間派遣された。太平洋戦争中には、海軍報道班員として二度南方に従軍した。一度目は、1942年2月後半にインドネシアに徴用され、約10か月滞在した。二度目の徴用では、1944年12月にフィリピンで米軍捕虜となり、三年間収容所の通訳をして1947年に帰国した。戦後は、通俗的な作品を多く発表した(山田昭夫「寒川光太郎」『日本近代文学辞典』日本近代文学館 1977年11月)。
- 9 神谷忠孝、前掲書、153頁。
- 10 寒川光太郎は、短編集『敵』(金星堂、1944年2月)に収録される「^{ジャングル}叢林」(初出:『新若人』1943年4月)と「^{ジャングル}叢林の水兵」(初出:『オール読物』1943年5月)に確認できるように、舞台となるボルネオは戦場、白人のオランダ兵及び日本兵は主要人物、といった典型的な戦争小説も執筆している。
- 11 「^{マタ・イタム}黒い瞳」は、寒川光太郎の『インドネシア酒壺』(1943年12月)に収録、短編集『敵』(金星堂、1944年2月)に再録された。本作品は同時代評がなく、先行論においても「オランダ軍にとらえられた日本人の屈辱をテーマとした作品」(神谷忠孝「南方徴用作家」『北海道大学人文科学論集』、1984年2月、16頁)、「混血女性の謎を包んだような心理からは思いがけない文学的香気さえ立ち迷う」(竹松良明の「寒川光太郎論」(『〈外地〉日本語学論』(神谷忠孝・木村一信(編)世界思想社、2007年3月、265頁)と簡単に内容が紹介されているのみである。
- 12 本作品では、日本人とインドネシア人の互いに対する好意的なまなざしは、「日本人であるといふと必ず慕ひ寄る住民は政府下級官使や雇兵を除いては、例外なく親切で、純朴で、嘘の云へないと云ふ性質を具へてゐた」(173頁)といった言葉に、悪人としての欧州人像は「オランダ側のこの待遇は、邦人に對する憎惡の念からばかりでは決してない、いやそれよりももつと酷い觀念から出發してゐたのだ」(174頁)といった言葉によって表されている。
- 13 実際に収容所の対象となるのは「日本人と名のつくものは原住民との間にできた子供に至るまで根こそぎ検束、さては日本人と關係のあつた東印度原住民まで」ということになった(「豪州の抑留生活(上)」『東京朝日新聞』1942年10月3日)。この記事によれば、蘭領ボルネオに在留する日本人は中部ジャワに移動させるということである。

「^{マダ、イタム}黒い瞳」の舞台となった、ボルネオ首都のバンジャルマシンには、日本人の収容所の存在は確認できないが、その可能性について否定はできない。

14 Adrian Vickers, 前掲書, pp. 25.

15 同上, pp. 26-27.

16 しかし、ユーピーが日本人に似ているため、日本人の収容所に投げ込まれたことについては、疑問が残る。ヨーロッパ人男性とインドネシア人または外来東洋人女性の婚姻から生まれた子供は、ヨーロッパ人として認められるのである。したがって、ユーピーのような欧亜混血が「敵国人」として扱われることはあり得ない。ユーピーは日本人に似た容姿を持つとされるが、その欧州性は以下の二点から確認できる。一点目は、ユーピーがバイオリンを持っており、劇場で演奏していたことである。「なぜ土人が支那人が作った劇場」(185頁)で演奏するのか、というモンテロの尋問に対して、ユーピーは「クロンチョン大会がある」ため、劇場で演奏するのだと答えた。クロンチョンは、ポルトガル音楽に由来しており、特に欧亜混血のコミュニティで展開してきた。最初はギターとタンバリンで演奏されたが、19世紀からフルートとバイオリンでも演奏されるようになる (Pauline Dublin Milone, “Indische Culture, and Its Relationship to Urban Life” Comparative Studies in Society and History Vol. 9 No. 4, July 1967, pp. 423)。実際に西欧の楽器を弾けたのは、ヨーロッパ教育を受けることのできた、非常に限られた人々だけであった。二点目に、ユーピーはオランダ雇兵のアマスに、「おい、混血娘！」と呼ばれており、オランダ側に彼女が欧亜混血という身分にあることを知られていたことが挙げられる。当時のインドネシアにおいて、ヨーロッパ人として認められた欧亜混血が逮捕され、収容所に投げ込まれるということは考えられない。

17 当初は、オランダ王立東印度軍はヨーロッパ人と先住民の半々で構成されていた。しかし、ヨーロッパ人志願兵の人数不足のため、19世紀後半から先住民兵が多く採用されるようになった。

18 オランダの植民地時代には、同階級に所属する者の間にも差別が起こったものの、逆差別はあり得なかった。同階級に所属する者の間の差別について、注7を参照。

19 W. F. Wertheim, 前掲書, pp. 290-291.

20 アマスが働いたゴム園はだれのものなのかは、引用文では説明されていない。だが、「このバリー河上流一帯のゴム植園は、盡きる果てを知らぬ程の廣大であつたが、その大半の経営者——邦人は、開戦と同時に逮捕され即日流れを下つて町へ連行された」(168頁)という言葉に表されるように、そのゴム園は日本人のものであったことが明らかにされている。

21 George McTurnan Kahin, 前掲書, pp. 453.

22 南方作戦の終了後、「俘虜月報」8月号には、日本軍の捕虜について報告されている。捕虜は「白人」と「白人以外」に分けられた。なお、「白人以外」の捕虜とは、「インド人、

インドネシア人、フィリピン人、マレー人、ビルマ人、中国人など、連合軍の植民地兵」を指している（内海愛子「解説」『東京裁判資料・俘虜情報局関係文書』（内海愛子・永井均（編）現代資料出版 1999年2月 25頁）。

23 Adrian Vickers, 前掲書, pp. 25.

24 Paul W. van der Veur, 前掲書, pp. 125.

25 Paul W. van der Veur, 前掲書, pp. 127.

26 ハインツ・ゴルヴィツァー『黄禍論とは何か』（（瀬野文教社）草思社 1999年8月19頁）。

27 Justus M. van der Kroef, 前掲書, April 1956, 140頁。

28 徴用作家の作品の検閲について、神谷忠孝氏は「軍に協力して体制よりの本を出す一方、「徴用作家」という大義名分によって検閲に手加減があった」ことを指摘している（神谷忠孝、前掲書、2001年、158頁）。

29 日本統治下、クリスチャンのアンボン人は日本軍に強く疑われていた。クリスチャンのアンボン人はオランダ王立東印度軍の先住民兵として多く採用されたため、オランダの降伏後にも、オランダと協力していると思われたのである。逆に日本の統治下では、蘭領東印度政府に差別されていたイスラム教徒の先住民は日本軍に支援された（Adrian Vickers, 前掲書, pp. 89）。また、オランダの植民地時代から抱いていた増悪のため、日本の降伏後、数多くの在留中国人と欧亜混血は、インドネシア人の過激派及び革命家によって虐殺された（Justus, M. Van Der Kroef, 前掲書, Qtr 1955, pp. 460）。

— Dewi Anggraeni, 広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学—